

山と博物館

第33巻 第10号 1988年10月25日

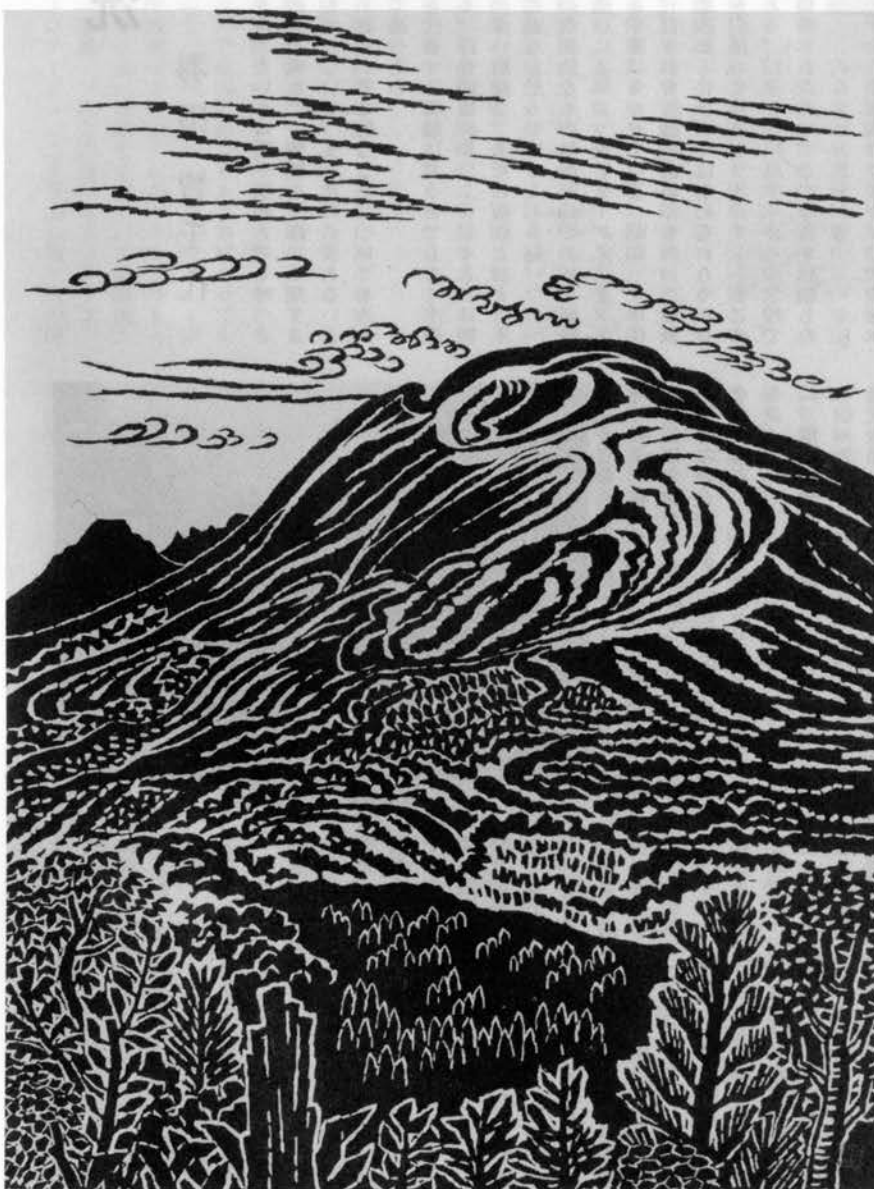
大町山岳博物館

特集 長野県内の美術館・博物館所蔵作品による

信州近代版画の歩み展 (1/30~1/13)

「信州近代版画の歩み展」によせて

石沢 清



夏雲浅間 平塚運一

江戸時代に、江戸に旅した人から「江戸みやげ」ということで、美しい多色刷木版の錦絵(浮世絵)が信州にもかなり入っていて、各地の旧家などでみかける。

多色刷りの美人画、役者絵、街道や、江戸風景などは、人々の目にはけんらんたるものだったにちがいない。

巨匠、北斎が北信で作品を残し、広重が木曾街道の連作を出しているのを見ても、版画人も信州各地を取材旅行している。当然、私淑した人もいたであろうが、浅学の私は作者も、作品も把握していない。

明治以後になると、信州における版画の歩みも判っている。伝統的な木版による制作のほか、石版技術なども入って来ている。まず、川上冬崖、岡村政子などの名があがってくる。しかし、なんとしても大きな足跡を残したのは、創作版画運動である。

上田市郊外の神川で大正期から昭和にかけて起った、農民美術運動にからんで発展していったのであるが、山本鼎、石井柏亭、石井鶴三、倉田白羊らが推進者である。

これらの人々は、学校教育の中でも、大きな運動になっていく自由画教育にも影響を与えていったのである。

戦後になると、学校教育の図工、美術学習の中に、版画がかなりの位置をしめるようになるが、増沢荘一郎などの推進は大きい。

信州からは武井武雄、山口進などの版画人も出ているが、なんといっても最大の人は、世界の版画人となった池田満寿夫である。

日本の版画壇にも、つぎつぎ若い信州生まれの版画人が出て活躍しているのは、たのしいことである。

今回意義深い本展が、大町で催されることになったことは、大きな喜びである。

(一水会会員)

信州版画界の現況

羽田 智千代

一、版画の種類

一口に版画と言ってもその種類は多く、特にこの頃の版種の多様化には驚かされる。もちろん信州の版画界として例外ではない。そこで先ず版種について簡単に述べ、版画鑑賞への一助としたい。

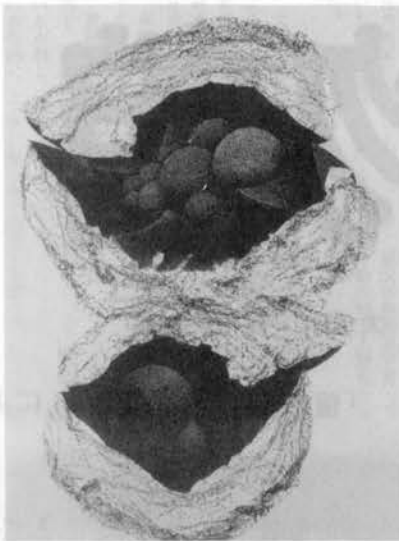
版画は普通版面の状態により凸版、凹版、平版、孔版に分類され、版の材質により木版画、銅版画、石版画(リトグラフ)、ステンシル(シルクスクリーン)に分けられている。

しかし十九世紀以来のこの分類法にはいろいろと疑問点も多くなっている。凹版や平版の木版画、凸版や平版の銅版画が作られたり、垂鉛板を使った銅版画、垂鉛板やアルミ板の石版画、ナイロンやビニロン、鋼鉄等のスクリーンを使ったシルクスクリーンなどが作られている。更にゼロックスやコンビュー

ター等を使つたいわば電子版画とでも呼べるようなものまで現れて、版種を正確に分類することはむずかしいし、またその必要もないように思われる。基本的なことについてもう少し続けて述べたい。

凸版を代表する版種は言うまでもなく木版画である。浮世絵版画等により日本人には特に馴染の深い版種で、未だに版画と言えば木版画のことだと思っている人も多い。

凹版の代表的なものは銅版画である。製版技法の違いによりエッチング、アクアチント、メソチント等に分かれている。昭和三十年代初めに、日本教育版画協会でもあった須坂の松原忠四郎らによつてはじめられたセルロイド板を引掻いて作るドライポイントもこの仲間である。以来小学校高学年から中学校で盛んに指導されたので、この版画を経験した人も多いと思われる。



池浦87-B 山口雅三

平版はリトグラフに代表されるが、最近この版種にはオリジナルティに対する問題もかなり多い。孔版と言えはシルクスクリーンがすぐに思い浮かぶが、先にも述べたようにこの版種は新素材(版材)を採り入れ、素材にそつて考え出された独特の技法でどんどん新しい版画を生んでいる。



宿場風景 飯田荘七

しかし最近では単独版でなく、いくつもの版種、技法、版材を組み合わせて一つの版に仕上げる複合版がふえている。つまりそれぞれが納得のいく表現をするための技法が、それぞれの作家によつて編み出されているのである。

二、信州版画界の現況

信州版画界の歩みについては今回の「信州近代版画の歩み展」の目録の解説に譲るとして、ここでは私の知る限りの信州版画界の現況を述べてみたい。

現在、県的な規模での組織としては信州版画協会がある。この会の誕生につながる基盤として、現代版画の父とも言われる山本鼎(1898~1940)の創作版画の運動があり、昭和七年須坂小学校において平塚運一を講師に木版画の講習会が開かれ、その時の作品を集めた手刷り版画集「櫟」がもとになって結成された信濃創作版画協会の活動や、終戦間も

ない昭和二十年、岡谷の生家に疎開していた武井武雄らのつくった双燈社文化サークル版画部の活動等があった。

また、成人学級の活動の中から生まれた版画サークル、県内各地の版画家達が独自に主宰していた版画教室等の活動もあった。

更昭和二十九年八月、双燈社に学び、当時岡谷の田中小に勤めていた増沢荘一郎(1917~1988)らにより第一回全国版画教育研究大会が田中小において開かれた。日本教育版画協会の委員長だった橋本興家、副委員長で協会生みの親であった大田耕士、恩地孝四郎、関野準一郎、久保貞次郎、山口進らが講師として招かれた。全国から二百名余の教師達が集まり、県下からも多くの教師が参加した。(筆者もこの時参加した者の一人である。)これらの教師達がその後信州の版画教育を力強く推進し、延いては信州版画界に与えた影響は大きかった。

こうした基盤があつて、昭和五十年、山本鼎記念館が行つた「信州の近代版画展」を見た増沢は、この展覧会を組織した美術評論家の小崎軍司に働きかけて同展を岡谷市に移動して開催した。これがきっかけになり増沢、小崎らによつて信州版画協会(初めは信州近代版画協会と称した)が設立されたのである。数年間はアンデパンダン展だったが、次第に応募数が増えて会場の確保がむずかしくなつたので、以後審査制により毎年秋に、長野、上田、小諸、松本、諏訪で巡回展を行っている。現在会員二百名余、中には中央画壇で活躍しているものも多いが、仕事のかたわら版画を作る人や版画教室に籍を置く主婦まで会員の構成は幅広い。会員は年一回の展覧会を励みに懸命な活動を続けている。県内の版画



夢見記一夜 田村文雄

家達の発表機関として、交流を深める場として、信州版画の裾野を拡げるのにも大きな役割を果たしている。

昨年、二十名の会員が仲間の作品七十点を携えて中国を訪れ、河北省石家庄市において日中友好版画交流展を開いた。今年は十一月十一日より六日間、中国の版画家三名と作品七十点を迎えて交流展を長野東急で開くことになっている。

会員の一部を紹介すると、一版多色刷りの木版で軽妙に自然を写す会長の岡村雄二、示現会員で日展にも出品する松本の宮浦真之助は同じ一版多色で構成のしつかりした重厚な作品を発表している。松代の山口雅三はピニール加工紙を使って板紙凸版によりモノクロの美しい心象表現に挑んでおり、国画展にも出品している。茅野の飯田莊七は古い建物に魅せられ、地味な多色刷りで構成の確かな木版を作り、小谷村出身で穂高町に住む武田光弘は黒白木版で歴史的な人物をテーマにデッサンのきいた表現をしている。共に日本版画院々友である。大町出身で松本の井口賀素己もシルクスクリーン等により心象表現の作品

を国画展等にも出品している。上山田に銅版画工房を持つ若林文夫はカラーエッチングによる幻想的な作品を作っている。

信濃創作版画協会も昭和七年以来、小林朝治(1898-1939)、松原忠四郎(1893-1974)らにより手刷り版画集『樫』が継続して刊行され、現在の事務局長北沢定一に引き継がれて本年六十六号を刊行した。六十五号からはワシントンに住む平塚運一(1895-)も作品を寄せてきている。今年十二月には、東京の日本美術家連盟の画廊で第一回樫展を開くことになっている。東京で開く理由は、全国各地に散らばる会員の便をはかつてのことのようだ。

県関係の主な会員では、田原幸三、関谷俊行、宮田三郎、小口益一、北沢定一らがいる。どの会にも属さずに県内各地で独自の活動を続ける作家も多いものと思われる。その中には下山方(京都生、岡谷在住)、中山正(新潟生、軽井沢在住)等のように県外から移り住んで活動する作家や工房を開いて版画の興隆につとめる者などが目立っている。

このほかに中央で国際的に活躍している作家も多し。その主だったところを上げてみる。

国際的に活躍している作家の筆頭は言うまでもなく池田満寿夫である。池田については今更ここで述べるまでもなく余りにも多くの人々の知るころなので紙面の都合もあり省略させてもらおう。西ベルリンに住み、ウイーン国際版画ビエンナーレでグランプリをとるなど高い評価を受けている長岡国入(1940-)、佐久出身)はエッチング、フロタージュ(こすり出し版)等の併

用版で自然破壊への怒りをぶつけた作品を発表しており、ノルウェーの国際版画ビエンナーレの審査員やアイスランド芸大の特別講師も勤めている。女子美大に勤め、日本版画協会の田村文雄(20歳)、小諸出身)はドラマチックな幻想を託した女をテーマにカラーリトグラフに表現し、フイレンツェ、リュブリアナ、ノルウェー等の国際版画ビエンナーレに出品するなど活躍を続けている。かつてローマに住み、版画工房などで修業をつみながらフイレンツェビエンナーレなどに出品した岡部和彦(1920-)、国画会員)は現在生地長野市に在って、なめらかな曲面の合成と独特の画面構成の作品を作っている。茅野出身の両角修(20歳)、日本版画協会)は釘や千枚通しでつくった孔による独特の技法で肌あい豊かな木版や金属凸版の抽象作品をマイアミのビエンナーレなどに出品し、精力的な活動を続けている。

東京に在ってタフな活動を続けている小松崎広子(1925-)、長野、モダンアート協会)はシルクスクリーンによる抽象作品をリュブリアナ、ノルウェーの各ビエンナーレに出品し、女性版画家の仲間と共に確かな歩みをしている。

中央で、主に国内を舞台に活躍する作家も多い。かつて信大教育学部で教鞭をとり、現在筑波大に在る松本出身の白木俊之(日本版画協会)は銅版で心象風景等の作品を発表している。更埴市森の生家で土俗的信仰などを主題に黒白木版の制作をする森猿郎(日本版画院同人)は版画絵本『はなとり地蔵』、

用版で自然破壊への怒りをぶつけた作品を発表しており、ノルウェーの国際版画ビエンナーレの審査員やアイスランド芸大の特別講師も勤めている。女子美大に勤め、日本版画協会の田村文雄(20歳)、小諸出身)はドラマチックな幻想を託した女をテーマにカラーリトグラフに表現し、フイレンツェ、リュブリアナ、ノルウェー等の国際版画ビエンナーレに出品するなど活躍を続けている。かつてローマに住み、版画工房などで修業をつみながらフイレンツェビエンナーレなどに出品した岡部和彦(1920-)、国画会員)は現在生地長野市に在って、なめらかな曲面の合成と独特の画面構成の作品を作っている。茅野出身の両角修(20歳)、日本版画協会)は釘や千枚通しでつくった孔による独特の技法で肌あい豊かな木版や金属凸版の抽象作品をマイアミのビエンナーレなどに出品し、精力的な活動を続けている。



No.13 両角 修

いつの日かこれらの作家やアマチュア版画家達の作品を一堂に集めて信州版画の一大展覧ができるならば、それは信州版画界の一層の発展を促すものであり、版画愛好家達にとっても大きな喜びであろう。是非そう願いたいものである。

(参考文獻)
 ○小崎重司編『長野県美術大事典』
 ○若林文夫編『版画事典』
 ○東京都美術館編『現代版画の一断面』
 ○中国河北画院編『中日友好版画展』目録

(信州版画協会運営委員)

いつの日かこれらの作家やアマチュア版画家達の作品を一堂に集めて信州版画の一大展覧ができるならば、それは信州版画界の一層の発展を促すものであり、版画愛好家達にとっても大きな喜びであろう。是非そう願いたいものである。

いつの日かこれらの作家やアマチュア版画家達の作品を一堂に集めて信州版画の一大展覧ができるならば、それは信州版画界の一層の発展を促すものであり、版画愛好家達にとっても大きな喜びであろう。是非そう願いたいものである。

大町の版画人のことなど

石 沢 清

県内の美術館、博物館が協力し合って「信州近代版画の歩み展」が企画され、大町山岳博物館も巡回される会場になったことは、美術展開催会場としても位置づいてきたことであり、喜ばしいことである。

昭和五十七年七月から約一ヶ月間、山岳博物館で行われた畦地梅太郎版画展は、穂高町の赤沼淳夫氏の全面協力で開催したものだったが、畦地版画の秀作といわれる「白い像」、「狩人」、「わかれ」、「山に叫ぶ」なども展示されたから、識者から高い評価を受けた。

山岳博物館を訪れる人は、山を愛し、自然を愛する人であるが、これらの人達は一方で美術を愛する人も多いのである。

したがって、その後何回か催されてきた各種の美術展も人気を博することとなったのだと思うのである。

大町・北安曇地方の版画にかかわることだが、大正期から昭和初期にかけて上小地方で起った農民美術運動の指導者であり、木版画もやっていた山本則氏らを迎えているのだから、版画の紹介があったり、木版画についての話もあったろうし、確かなこととは判らない。

木版画を手造りの小額に入れた土産品ふうのものを白馬の農家でみたことがあったが、祖父の自作だと言っていた。同じ祖父の手によるという木彫の登山人形もあった。

大町・北安曇から出た版画人としては、武田信太郎氏(小谷村北小谷)がいる。長野師範出の教師だったが辞めて、東京美術校(現聖大)に学び、パリにも留学した。日本画家(院展)だったが、版画人としても第一人者で日本版画協会会員でも注目の人だった。

戦時中小谷に疎開していたが、この地に作品は少いようだ。私は大町の商家でみせてもらったことがあった。

富田三郎氏(美麻村出身・東京在住)。氏も長野師範出で、教職にあつて油絵を描いて一水会などに出品していたが辞し、版画界に入った。日本全国の風景を精力的に木版画にして年に何回かの個展で発表しているが、着

々と地位を確かなものにしていく。

内藤和泉氏(池田町出身・千葉在住)は岩波書店を退いてから版画の道に入り、東京などで個展を催しているが、モチーフは風景・草花などで素直な形りで人気がある。故郷の池田でも個展をやった。

井口實業己氏(大町市出身・松本在住)武蔵野美術洋画科出で、独自の絵画制作と平行して版画も手がけているが、個性的である。国画会に出品している。信州版画協会会員で有力メンバーの一人である。

武田光弘氏(小谷村出身・穂高在住)信大教育学部出の教師であるが、白黒の木版画で最近ではメキメキと力をつけ、日本版画院で大賞など受賞を重ね、現在同院院友に推されている。

塩原光巨氏(池田町)。日本画家で、かつて院展にも入選した老画家だが、三十余年間木版で高山植物などを、はがき大に手刷りして出して旅の人に喜ばれている。このほか、都市からこの地に来て、版画をやった人も何人かいるが省略する。



初冬 羽田智千代



月 齊藤 清

現在、大町に居住していて制作している三人の作品をこの機会に招待して、市民の皆さんに鑑賞していただくこととなりましたので、作風、略歴などを紹介しておきます。

羽田智千代氏(白塩町)
木版で、ほぼ黒一色の刷りである。この地の風物をさりげなく題材にしていて、作品には素直な温かい詩情がただよっている。

一九二七年大町市生まれ。長年教職にあつた。教育版画界の大田耕士、増沢荘一郎氏など教育版画界の先導者たちと交流があり、学校教育に於ける版画研究に深くかかわってきた。

指導した子どもたちの全国児童生徒版画展、日本教育版画展での評価には高いものがあつた。氏自身もこの面で表彰を受けているし、全国委員でもある。教職を退いてから自作版画に力を入れ、信州版画展での受賞のほか、日本版画院展にも入選した。現在、信州版画協会会員で、中信地区責任者である。

齊藤 清氏(大町温泉郷)
木版で黒による作品が主だが、確かな表現力と、木彫人のもつ刀の切れ味が作用して小気味のよい表現になっている。作品にただよう詩情は、現代的であるのも魅力である。

一九四二年大町市生まれ。中学時代尾竹正野氏に教わり氏のすすめもあって六〇年に農民美術作家橋本千春氏の門に入る。六六年大町に帰って木彫工房を開く。七七年ごろより独自の木板絵を始めるが、これが注目され、八四年にアメリカ、シアトル市の桜祭り作品が招かれたり、国内各地で作品展を行うことになる。

一方で版画もやるようになり、信州版画協会展での受賞もあり、現在、同会会員である。最近の穂高、大町での個展も好評であった。



蚕蔵 山下 修

山下 修氏(社)

伝統的な木版による多色刷り版画で、技術も高度である。信州、特に大町が好きで、横浜から夫婦で移り住んだだけに、題材は北アルプス山麓風景が多い。

四季の山麓の自然に、あやしくおりなす陽光も確かな技術でとらえられていて感じ入る人も多い。

一九五三年横浜生まれ。高校時代から絵画研究所などで描画や、デッサンを学ぶ。七八年師の吉田達志氏(吉田版画スタジオ)とともに、美麻村に開設した同スタジオに入り、同氏とともにあつたが、同所が閉所後は、大町市野口に居を移し、版画工房を持つ。

多色刷り版画は吉田氏らに学び、現在もその技術で彫り続けている。

初個展を大町で行い注目された。現在、信州版画協会会員。最近、大町市社に、住宅兼工房を建てた。

(二)水会会員、山岳博物館嘱託員

山と博物館第33巻第10号

発行所 長野県大町市 TEL0260-2211
大町山岳博物館
印刷所 長野県大町市深町 大承タイムス印刷部
定価 年額一、二〇〇円(送料共)印手不可
郵便振替口座番号(長野四)一三三一九三